ピー・エス・シー

「印刷・製本管理システム」

入力作業負荷を半減

「見える化」の構築に向けて運用開始

「街のプリントマーケット」を掲げ、企画・制作・印刷から製本までのトータルサービスを提供する㈱サカエ（本社／東京都荒川区東尾久3－24－18、志鳥勝久社長）は今年5月より生産管理システムをピー・エス・シー㈱の「製本管理システム」に「印刷管理システム」を統合した「印刷・製本管理システム」に全面移行し、効率的な生産体制の構築と業務改善を実現している。そこで同社・志鳥社長とシステム構築を担当した岡本健二部長に導入目的やその後の成果について伺った。

サカエ

同社は、1971年4月に製本加工専業の栄紙工として創業。1991年には、企画・制作から印刷までの業務を請け負う㈱アシストを設立し、本格的な印刷市場への進出を開始。さらに2008年には、中国・大連に組版やデータ入力を行う「日本栄帮股份公司大連代表処」出張所を開設し、DTP部門の強化とコスト低減化など先進的な取り組みを展開している。そして現在では、印刷物の企画・デザインから印刷・製本加工までの一貫生産を手がける総合印刷・製本会社として成長を遂げている。

志鳥社長（左）と岡本部長

その同社がこのほど「印刷・製本管理システム」を導入した背景について志鳥社長は「当社では、10年以上前より他社の管理システムを使用していた。しかし、システム自体の老朽化、そして基幹PCであるWindows XPのサポートが2014年に終了することから、新たな管理システムを模索していた」と説明する。

新システム導入に当たり志鳥社長は、当初、知人のソフト開発会社への発注を考え、実際に見積まで依頼していた。しかし製本業界で多くの実績があるピー・エス・シーの「製本管理システム」を知り、すぐに岡本部長を通じて、あらためてシステム開発を依頼することとなった。

印刷・製本の2つのシステムを統合

カスタマイズに定評のあるピー・エス・シーの管理システムではあるが、同社が強く求めたのは、印刷・製本の2つの業務を統合したシステムであり、そして同社を含むグループ3社で連動したシステムであることだと岡本部長は語る。

「当社は、印刷と製本の業務を行っていることから、その2つの工程を統合する必要がある。また将来的なグループ3社のネットワーク構築を見据え、社内の進捗管理機能の追加を要望した」（岡本部長）

導入を決断した同社では、新システムの構築に向け、既存システムからのデータ移植を開始。印刷・製本の2つの工程を連動させることで、さまざまな試行錯誤を続けていたが、しかし基本仕様の中に同社がこれまで業務上、使用していた機能はある程度、搭載されていたことから比較的スムーズな移行を実現することができたという。

そして今年5月、正式な管理システムとしての運用を開始。その成果は、すぐに結果となって現れた。

従来システムは、これまで自社内で度重なるカスタマイズを実施した影響から、多くのシステム上の不具合が生じるようになっていた。例えば、印刷伝票の発行から製本伝票発行といった複数のジョブに移行するたびに、初期メニューに戻って選択しなければならなかった。また売上計算などに連結していないなど、非常に時間と手間がかかっていた。しかし新システムは、複数のジョブも同一画面で全て完結できるようになったという。

導入後はデータ入力作業のストレスが解消

一元管理システムとしての活用を視野に

これまで抱えていたデータ入力のストレスを一気に解消した新システムは、手書き伝票でしか発行できなった協力会社への発注書など数多くの伝票が発行できるようになり、さらにそれらの情報全てデジタルデータとして保存できるようになった。

「時間コストでは、約50％の短縮が実現でき、さらにデータ化によって月次経理データも迅速に確認できるようになった」（岡本部長）

セキュリティにも万全の体制を整えている同社では、従業員全てにIC機能を搭載した社員証を発行し、入退室を含む管理を徹底している。志鳥社長は、その機能を利用した「見える化」の採用を検討しているという。

「今後はそのIC機能とバーコードシステムを活用し、さらに新システムと融合した生産部門の進捗管理システムとしての運用や本社の経理ソフトとリンクさせた一元管理も視野に入れたシステム構築を行っており、最終的にはさらなる合理化・見える化が実現できるはず」（志鳥社長）

昨年4月、創業40周年を迎えると同時に、生産活動の新拠点として東京・足立区に鹿浜工場を建設し、新たなスタートを切った同社では、総合印刷・製本会社として、紙メディアによる製品提供だけでなく、電子書籍への取り組みにもすでに開始しており、紙と電子の両媒体をサービスフローとして扱うことで、次世代型情報加工業への進化を続けている。